

生涯研修プログラム

3. ミートザエキスパート A.

3) 腹腔鏡下腔式子宮全摘術

順天堂大学講師 武 内 裕 之

子宮摘出術は婦人科領域で最も頻度の高い手術法の一つであり、これまでは腹式単純子宮摘出術(TAH)および腔式単純子宮摘出術(TVH)が行われてきた。TVHは開腹しないため、手術侵襲が非常に小さい術式であるが、手術の適応が患者の分娩歴、手術の既往、子宮の可動性により制限されるため、その適応となるのは子宮摘出術例の一部に限られている。1989年 Reich により報告され

た腹腔鏡下子宮全摘術(以下 LAVH)は腹腔鏡を併用することにより、従来 TAH が行われていた症例に対し、より侵襲の小さな TVH を施行する術式である。

本講演では、当教室における LAVH の手術手技の実際をビデオで供覧し、LAVH の現況と将来について概説する。

4) 経腔超音波の活用

日本医科大学助教授 石 原 楷 輔

現在、産婦人科領域では経腔超音波診断法を利用しない日常診療は考えられない。とくに、妊娠初期(多胎、胎児発育、外妊、奇胎)、前置胎盤、頸管無力症、卵胞モニタリング、骨盤内腫瘍(筋腫、卵巣嚢腫)などの診断には欠かすことはできない。

しかし、これらの診断にあたっては基本的なプローブの操作や妊娠によって独特に変化する子宮の超音波画像に習熟することが大切である。具体例として、卵巣の検出法や前置胎盤、頸管無力症、切迫流産の診断の基礎になる子宮峡部・頸部の基本画像の読影とそのピットフォールについて解説する。妊娠中期でしばしば前置胎盤と診断されやすい理由、頸管無力症におけるプローブ操作の重要性やその診断と縫縮術後の管理について、ま

た、切迫流産の頸管所見では頸管長や内子宮口の形態ばかりでなくテクスチャーとして新しく頸管腺像の有無との関係についても述べる。さらに、若年者にしばしば発生する急性腹症としての出血性卵巣嚢胞や PROM の症例に突発する臍帯脱出についても言及する。

一方、経腔エコーの新しい活用として、子宮内腔に生理食塩水を注入しながら観察する Sono-hysterography について実例(内膜ポリープ、内膜増殖症、粘膜下筋腫、体癌)を示しながら解説し、また、前回帝王切開の症例について、経腔エコーでその瘢痕部の形態や厚さの検討が今回の経腔分娩の適否(子宮破裂との関連)に利用できるかどうかについても述べてみたい。